



～ 1年生を温かく迎えるために ～ 精一杯式の準備を頑張りました

4月8日（水）の午後は、5・6年生が中心となって、入学式の準備をしてくださいました。新しい1年生を気持ちよく迎えるためということはもちろんですが、この作業を通して、高学年としての自覚を高めること、後輩へ「思い」を引き継ぐこと、大事な節目の行事を皆で協力して進めることの大切さを実感することなど、学べるものがたくさんあります。さすが高学年、てきぱきと気持ちよく動き、最高の準備をしてくださいました。入学式は、新1年生だけでなく、学校全体にとっても大切なスタートの式と言えそうです。（写真左：会場設営をしています、中央：きれいに仕上がった会場、右：通路の掃除もしっかりできました）



前途洋々

今年もかわいい1年生が88名入学してきました！ ようこそ花園小へ！

9日（木）、宇土市教育委員会を含め、多くの来賓の方々をお迎えし、本年度の入学式を無事執り行うことができました。少し緊張した面持ちの子供も多かったようですが、すぐに小学校生活に慣れていってくれることでしょう。いよいよ義務教育の始まり。9年間の義務教育の意味は、簡単に言うと、社会生活を営むに困らない力を身に付けるということです。重要な9年間です。子供たちの育ちや学びのお手伝いが最大限にできるよう学校も力を尽くしていきます。私自身、人間の日々の生活は「旅」のようなものだと考えています。特に、学齢期の子供たちにとっては、当たり前の日々でさえ、大きな「旅」の連続です。この旅を経て、「自立」への力を付けていくのだと思います。様々な「壁」を感じることもあって当たり前でしょう。その「壁」を乗り越えていく手助けが周囲の大人には必要ですが、これは、「壁」そのものを大人が取り払うことではありません。「いつでもあなたの力になるよ」というメッセージが必要ですし、子供の思いを理解した上で、一緒にゴールへ向かう道順を考えていくことも出てくると思います。これが「寄り添う」ということの意味ではないかと思えます。ぜひ、今後も88名の新入生の成長を応援してくださいね！



式後の後片付けも6年生が大活躍

様々な視点から「ふるさと花園」をみる①

宇土市・熊本市・宇城市にまたがり、我々が毎日眺めている「雁回山」。標高は314mとのことですが、結構高いと思いませんか？木原山とも言われています。なぜ「雁回山」と言われるようになったか、ご存じの方も多いと思いますが、再度調べてみました。林野庁のHPによると（以下抜粋）「木原山は、鎮西八郎源為朝（ちんぜいはちろうみなもとのためとも）の居城であったと伝えられています。為朝は鎌倉幕府を開いた源頼朝の叔父であり、初代琉球国王とされている舜天（しゅんてん）の父と云われています。若い為朝はあまりに乱暴者であったため、13歳のときに父親の為義（ためよし）から九州に追放されましたが、後に肥後（現在の熊本）の木原山に城を築き、阿蘇大宮司忠国（だいがうじただくに）の掣（むこ）となったのち、九州を制圧し、自ら鎮西（ちんぜい）八郎と称しました。その為朝は弓の名手としても有名であり、強弓で木原山を通る雁をいつも射落としていたため雁は恐れをなし、木原山の上を避けるように回って通るようになったことから、『雁回山（がんかいざん）』と呼ばれるようになったと云われています。」このようなエピソードを頭に入れて雁回山を眺めると、また違った見え方がするように思えます。これからも時々、地域に根ざしたお話をご紹介します。

